

—外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書 23—

nana      kuma  
七隈古墳群

—C2号墳調査報告—

2004

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では開発に伴って消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成15年度に行いました七隈古墳群C-2号墳の調査について報告するものです。今回の調査により判明した多くの事実は、この地域における歴史を考える上で大きな手がかりとなるでしょう。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました国土交通省九州地方建設局福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社を始めとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成16年3月12日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

### 一例 言一

- ・本書は福岡市教育委員会が2003年5月19日から2003年6月2日にかけて行った七隈古墳群C-2号墳調査の報告である。
- ・調査、そして本書の執筆・編集は藏富士覚が担当した。
- ・本書に関する資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

## 目次

I はじめ	.....1	III 調査の記録	.....5
1. 調査に至る経緯	.....1	1. 古墳（C-2号墳）の調査	.....5
2. 調査の組織	.....1	IV おわりに	.....8
II 位置と環境	.....2		
1. 油山山麓の群集墳	.....2		
2. 七隈古墳群について	.....2		

### 挿図目次

図1 油山周辺の群集墳 (1/8,000)	.....	図5 C-2号墳現況 (1/50)	.....
図2 七隈古墳群分布 (1/15,000)	.....	図6 C-2号墳墳丘遺存状況 (1/50)	.....
図3 七隈古墳群 (1/600, 1/120, 1/6)	.....	図7 C-2号墳主体部 (1/40)	.....
図4 七隈古墳群C群 (1/200)	.....	図8 出土遺物 (1/3)	.....

### 図版目次

1 調査前現況 (2000年調査時)	.....	2 主体部検出状況 (北から)	.....
3 古墳完剥状況 (1) (南西から)	.....	4 古墳完剥状況 (2) (西から)	.....
5 主体部壁体 (1) (南から)	.....	6 主体部壁体 (2) (北から)	.....

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

当古墳群に近接した梅林遺跡調査の際、担当者であった井澤洋一氏は、弓池のほとりに2基の古墳が存在することを確認した。また、この地が外環状道路建設予定地であったことから、2000年2月18日から21日にかけて古墳の測量を行い、同時に石室内部に土嚢を充填して古墳の保護を図った。

この後、外環状道路工事の進捗に伴い、当古墳群に対する処置が問題となった。協議を重ねた結果、まず1号墳の調査を行い、時期を後にして2号墳の調査を実施することになった。1号墳は2000年7月14日より調査を始め、同年8月18日に調査を終了した。2号墳は諸処の条件整備を行い、2003年5月19日より調査を開始した。

### 2. 調査の組織

調査委託	国土交通省九州地方建設局福岡国道工事事務所 福岡北九州高速道路公社
調査主体	福岡市教育委員会
事前審査	埋蔵文化財課 事前審査係長 池崎謙二 田上勇一郎
庶務担当	文化財整備課 後藤泰子
調査担当	文化財部埋蔵文化財課 藏富士寛
調査作業	阿比留忠義 井上八郎 廣瀬 梓 永薫重俊 吉川春美
整理作業	日名子節子

遺跡調査番号	0320		遺 跡 略 号	NNK-C	
地 潟	城南区梅林4丁目地内		分布地図記号	七隈74	
開 発 面 積		調 査 面 積	27.5m <sup>2</sup>	調査対象面積	
調 査 期 間	2003.5.19~2003.6.2				

## II 位置と環境

### 1. 油山山麓の群集墳（図1）

早良平野は福岡市の西南部に広がる平野で、その西側を長垂丘陵、東側を飯倉丘陵等に囲まれる。平野の西よりには室見川が流れ、早良平野は主としてこれら河川の沖積作用により形成される。油山は早良平野東縁に位置する山塊であり、その山麓には数多くの群集墳が営まれていることで知られている。大半の群集墳は古墳時代後期に築造を開始するものであるが、この中にはクエゾノ古墳群（常松編1995）、今回調査した七隈古墳群C群のように5世紀段階に営まれた古墳群も存在する。また、これら群集墳が営まれる時期には油山山麓周辺においてもいくつか前方後円墳の存在が知られている。それら前方後円墳の中でも、独立して存在するもの（梅林古墳（濱石他1991）、神松寺御陵古墳（山崎1978））や、群集墳中に存在するもの（クエゾノ1号墳（常松編1995）、桧原2号墳（吉留編1997）、柏原A—2号墳（山崎編1986））という違いがあり、群集墳間の質的な相違や、当期における前方後円墳という墳丘形態が持つ意味を考察する上においても良い手がかりを与えていている。

### 2. 七隈古墳群について（図2・3）

七隈古墳群はA～Cの3群、計12基の古墳により構成される。この内A群3基（5・6・8号墳）、C群2基（1・2号墳）の内容が発掘調査により明らかになっている。現況をみれば古墳の分布は散漫であるが、周辺の開発は相当に進んでおり、この事実を持って往時の状況を窺うことはできないだろう。A群とB群はやや距離をおいて存在し、C群はA群の谷を隔てた南側に位置している。

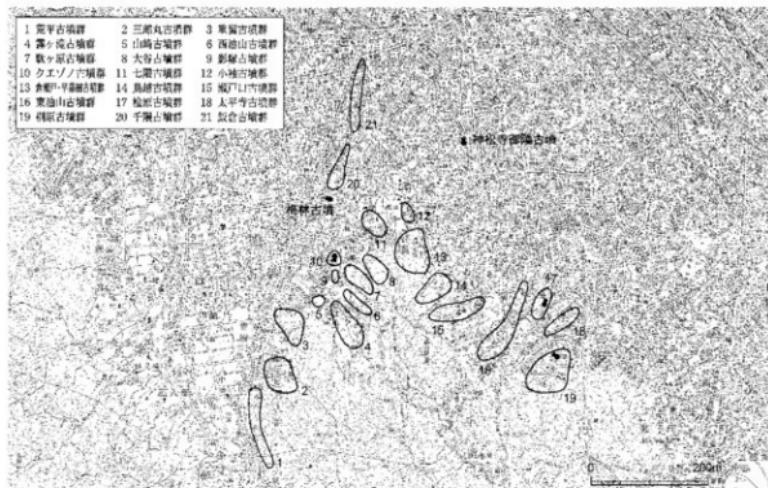


図1 油山周辺の群集墳 (1/8,000)

### A群（塙屋1985）

A群は8基の古墳により構成される。いずれの古墳も複数の独立丘陵の頂部および斜面部分に立地している。これら丘陵の裾部には弓池、弓掛池、五ヶ村池等が造られている。A群8基の古墳は福岡大学の敷地内にあり、グランド等の造成により現在すべての古墳が失われている。当時、造成により失われつつある古墳に対し、福岡大学歴史研究同好会および福岡市教育委員会では2次にわたる発掘調査を行い記録保存に努めた。第1次調査は1970年6月23日～7月5日にかけて実施され、5・6号墳2基の調査を行っている。この時既に1～4・7号墳は破壊されていたようだ。第2次調査は工事中に発見された8号墳に対して行われた。調査期間は1970年8月29日～9月5日である。

5号墳は径15～16m、高さ2.5m程の墳丘が遺存していたが、攪乱が激しく墳丘規模および主体部の詳細は不明である。トレンチ調査の際、鉄製品、玉類、須恵器が採集されており、特に須恵器は墳丘裾部にまとまつた出土をしており、この須恵器はいずれも原位置を保っていると判断されている。その分布から大きく第1から3までの3群に区分されるが、2・3群における蓋杯をみれば概ねTK10（新）型式期に位置づけることができるだろう。6号墳は現況において径20mを測る円墳であり、主体部には單室構造の横穴式石室を持つ。基底部の石材のみが残存しており、玄室平面形は3.2×2.5mの長方形プランを呈する。羨道部には閉塞石が一部残存する。石室は玄門部・羨道の幅が狭く、比較的古式の様相を留めている。玉類や須恵器、土師器が出土しており、須恵器はTK10型式期に相当しよう。8号墳は墳丘部分の削平が激しく、墳丘規模は不明である。主体部は単室構造の横穴式石室で、1.8×1.8mの方形プランを呈する。羨道部の途中には塊石積みによる閉塞が残る。鉄鎌、鋤先といった鉄製品の他、玉類、須恵器・土師器が出土しており、また羨道・墓道部分には多量の鉄滓が供獻されていた。このようにA群は周辺の群集墳と同様、古墳時代後期に築造の開始する群集墳であるといえる。

### B群

B群では現在2基の古墳が存在している。B群はA群の北側800m程の離れた位置に存在する。各古墳は福岡大学に隣接した民家の敷地内にあり、露出した石室石材の状況をみれば、B群はA群と同じく古墳時代後期の古墳群であるといえよう。

### C群（藏富士2002）

C群では現在2基の古墳が確認されている。1号墳は外環状道路工事の関係で2000年7月14日～8月18日にかけて調査を行った。墳丘の大半を失っていたが、調査の結果、主体部は初期横穴式石室（堅穴系横口式石室）であることが判明した。主体部内からは蓋杯、縄や鉄鎌、刀子が出土し、須恵器の時期からTK47型式期の築造であることが推定される。5世紀段階における主体部内容器供獻の数少ない事例としても重要なものである。2号墳は今回報告する古墳である。墳丘盛土は失われていたが、主体部である堅穴式石室は遺存していた。1号墳と近接した築造時期が考えられる。



図2 七隈古墳群分布 (1/15,000)

## 文献

- 藏富士寛2002「七隈古墳群C-1号墳」『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第700集  
 清石哲也ほか1991『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第240集  
 塙屋勝利1985「七隈古墳群の調査」井深洋一編『鳥越・七隈古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第124集  
 常松幹雄編1995『クエノノ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集  
 山崎純男編1978『神松寺跡古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第45集  
 山崎純男編1986『柏原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第125集  
 吉留秀敏編1997『徐原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第540集

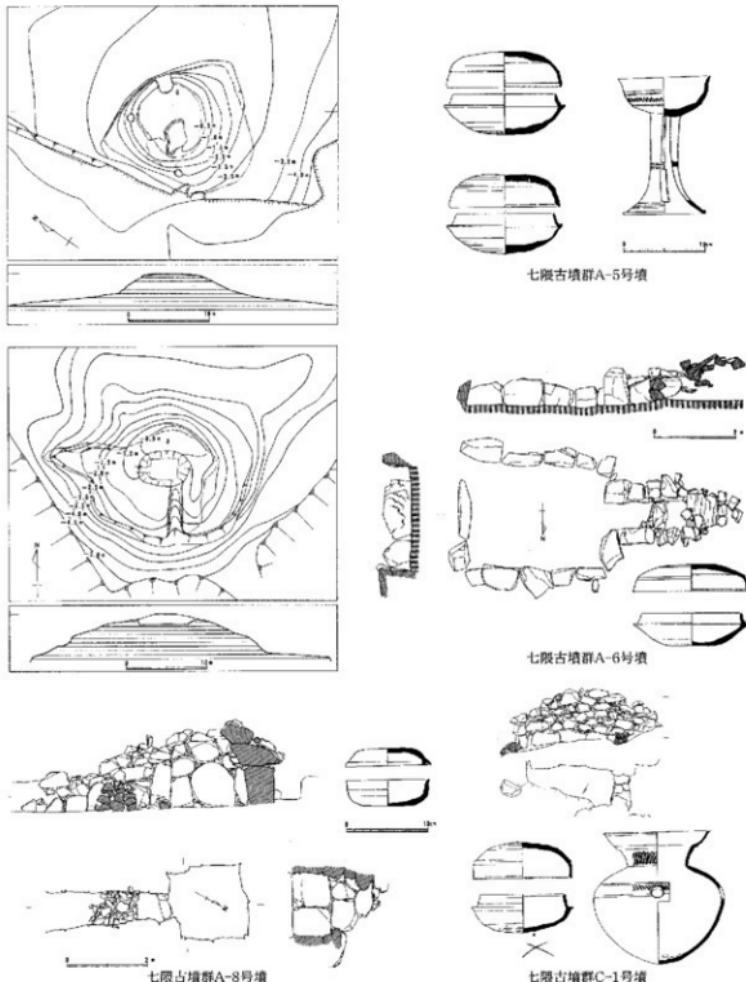


図3 七隈古墳群 (1/600, 1/120, 1/6)

### III 調査の記録

#### 1. 古墳（C—2号墳）の調査

##### (1) 古墳の現況（図4・5）

2号墳は弓池と呼ばれる池の南斜面に位置する。18mほど西側の位置には前回調査を行った1号墳が存在する（図4）。この2基の古墳は梅林遺跡調査の際、その担当者である井澤洋一氏によつて確認されたものである。古墳周辺には近接してマンションが建ち並び、池の護岸も行われているなど地形の改変が著しく、また古墳自身、池の水位の上昇による影響を直接受ける位置にある。2000年における1号墳調査の際、2号墳の状況をみたところ、発見の際に行われた保護策（石柳周辺への土嚢の充填）により安定した状況を保っていたが、それ以前に古墳そもそもの破壊は相当に進んでいたと思われ、2号墳の石柳は半ば露出し、石柳石材のいくつかも周辺に散乱するという状態にあった。古墳の周辺には土砂が流れ込んでいたが、露出した石材の状況をみる限り、墳丘盛土の大半は既に流出しているように見受けられた（図5）。

1号墳の調査の後、外環状道路工事の進展により、2003年に2号墳の調査を開始することとなつた。調査の開始前、改めて2号墳の現況をみると古墳の上には更に多くの土砂が流入しており、周辺の状況は大きく様変わりしていた。調査はまず、古墳上を覆っていた流入土及び表土を除去することより開始した。その結果、墳丘盛土は全く残っておらず、石柳石材が完全に露出していたことが明らかとなつた。散乱する石材をみても、多くの石材は池の方角へと移動しており、池の水により盛土はすべて洗い流されてしまったものと考えられる。また、古墳保護のため石室内には土嚢を充填していたが、それでも実際石柳石材を露出させてみると、古墳発見時にはある程度旧状を留めているであろう天井石が、石柳内へ落ち込んでいた。

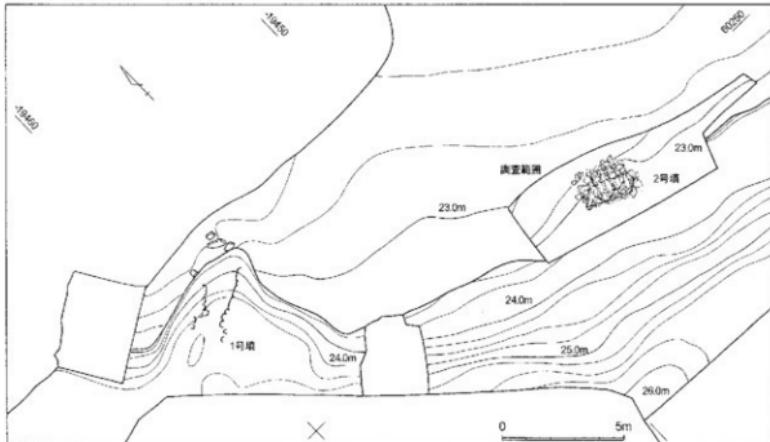


図4 七隈古墳群C群（1/200）

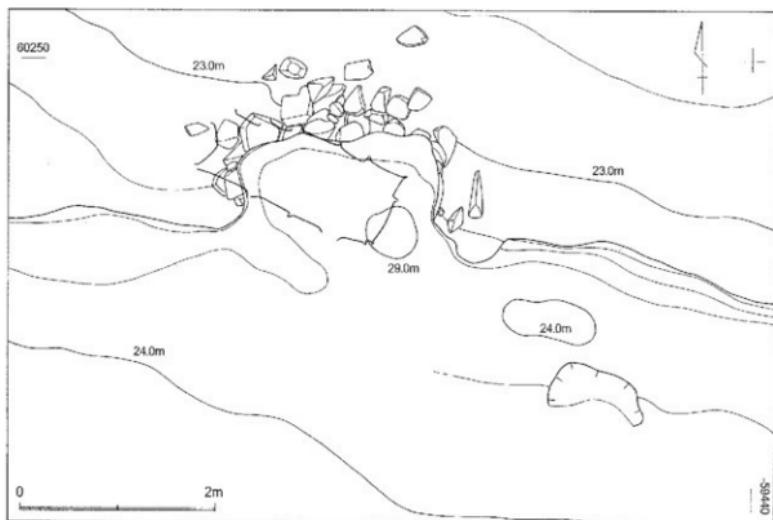


図5 C-2号墳古墳現況(1/50)

#### (2) 古墳の形態(図6)

先にも述べたように、2号墳は墳丘盛土がすでに流出しており、石柳石材がすべて露出していた。また、古墳の造成面である褐色砂質土上も剥き出しになっていたり、池の方角へと傾斜していた。このような状況から、まず墳丘規模把握のため古墳周辺における周溝の確認に努めた。古墳の南側は、1mほどの近接した位置に設けた側溝による擾乱を受け、また北側は地表面が急激な傾斜をみせていた。そのため古墳の周囲に幅3m、長さ12mほどの細長い調査区を設定し、区内の精査に努めた。その結果、石室の南東側と南西側のそれぞれ1mの所に弧状を呈する溝を検出した。南東側の溝は深さ17cm、南西側のそれは深さ5cmとそれぞれ浅い。両者の関係は先に述べた側溝に切られているため不明であるが、共に古墳から同じ距離に位置し、古墳を中心として弧を描いていることから、2号墳の周溝とみなして良いだろう。よって石柳中央を墳丘の中心と想定し、これら溝の状況より2号墳の墳丘を考えれば、東西方向に長い橢円形を呈した長軸5m、短軸3mほどの小規模なものに復元できるだろう。

#### (3) 主体部(図7)

2号墳の主体部は竪穴式石柳である。長さ1.7m、幅0.8~0.65mを測る平面プランを有し、主軸はN-68°—Wにとる。石柳石材はすべて花崗岩である。石柳南東側の小口部分が幅広となっているが、これは石柳北側隅の基底部石材の配置に若干の乱れが生じているためであり、本来の石柳幅は等しく8m程度と考えて良いだろう。天井石には8石を用いており、横長の石材を主軸に直交して配している。石材の厚さは30~40cm程度。先にも述べたように天井石はすべて石柳内へ落ち込んでいる。

また、石柳の各壁体は基底部に大形の石材(腰石)を配し、その上に数段の石積みを行っている。

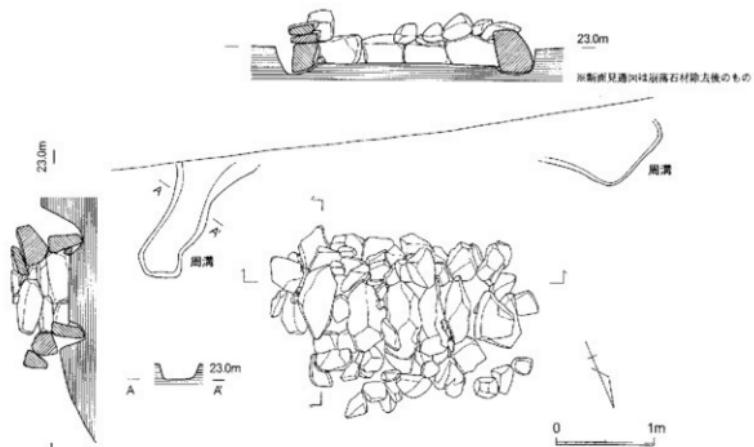


図6 C-2号填埋堆遺存状況 (1/50)

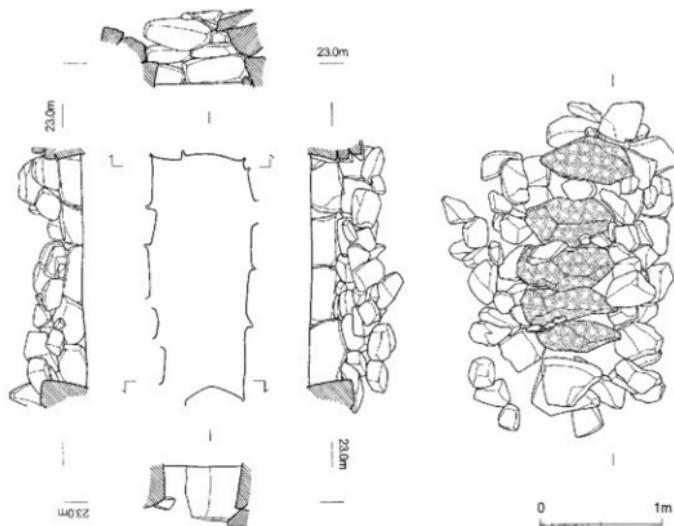


図7 C-2号填埋堆主体部 (1/40)

北西壁の北隅において腰石は欠落しているが、これは攪乱等により失われたものであろう。周辺における石積みの乱れもこのことを裏付けている。長辺側の石積み部分をみると、南西側の石積みは石槨内へと落ち込み、北東側の石積みは石槨外への方へと崩れている。これは2号墳の北側にある溜池の水位の変動により、石積みの崩壊が生じていることを示している。そして南西側の石積みをみれば、腰石の上には3~4段の石積みが行なわれていたことが分かる。各壁は面をそろえ、平滑な石積みが行なわれている。壁体の遺存状況から勘案すれば、壁体の高さ、つまり石室高は60cm程に復元できるだろう。北西壁を除き、腰石の上面はほぼ平坦にそろえられているが、北西壁の腰石のみが石積み1段分、15~20cm程その上端が高くなっている。

次に石槨構築時の状況についてみることにする。水の被害があまり及んでいない古墳南側における地山の状況をみると、整形形40cmほどの掘り込みを行い、石材を据えていることが分かる。これは腰石上面の高さとほぼ等しく、埴丘盛土は石槨石積みと同時に行われたのであろう。

#### (4) 出土遺物 (図8)

2号墳は長年水の影響に晒されてきたせいか、表土中より土師器、須恵器といったごくわずかの遺物が出土したのみである。出土した遺物はすべて古墳時代のものである。

1は須恵器杯身である。立ち上がりは1.3cmと比較的高く、その端部は丸くさめている。蓋の口縁部が融着する。2は上師器蓋である。摩耗が激しく、調整は不明である。



図8 出土遺物 (1/3)

## IV おわりに

ここで、この調査により判明した2号墳の所見を例挙し、まとめに代えたい。

### 1. 墓丘—主体部について

2号墳南側より周溝の一部が検出されており、それによれば長軸5m、短軸3mの楕円形を描く墳丘形態を想定できる。主体部は竪穴式石槨で、規模は長さ1.7m、幅0.8m、高さ6mを測る。その壁体には腰石の使用が認められる。

### 2. 時期について

今回の調査では古墳の築造時期を示す明確な遺物は出土していない。そこで、主体部の構造より年代について考えてみることにしたい。主体部である竪穴式石槨の壁体は腰石を用いるなど、その構築方法において横穴式石室との共通性を強く窺わせるものとなっている。また、石槨構築時の地山掘削も低い腰石が隠れる程度(40cm程)しか行われておらず、このような状況をみれば、主として5世紀代、遅くとも6世紀前半までの横穴式石室構築のあり方と共通するものといえよう。隣接する1号墳はTK4.7型式期に位置づけることができるが、これを勘案すれば、2号墳の築造時期は1号墳に近い築造時期、5世紀末葉を前後する段階に比定することができるだろう。

尚、出土している須恵器杯身はTK10型式期に位置づけることのできるものであり、この遺物については、いずれかの段階に2号墳に伴っていたものと考えておきたい。



1



2



3



4



5



6

1 調査前現況（2000年調査時）

3 古墳完掘状況（1）（南西から）

5 主体部壁体（1）（南から）

2 主体部検出状況（北から）

4 古墳完掘状況（2）（西から）

6 主体部壁体（2）（北から）



遺跡名 七隈古墳群 C-2号墳  
遺跡番号 NNNK-C  
調査番号 0320

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第803集

—外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書 23—

## 七隈古墳群

—C2号墳調査報告—

2004年(平成16年)3月12日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 国崎美峰堂  
福岡市東区箱崎1丁目20-5